

# 親子関係が青年期の自我発達上の危機へ及ぼす影響 — 日中比較研究 —<sup>(1)</sup>

## The influence of parent-child relationships on the crisis of ego development in Adolescence

— A comparison of Japanese and Chinese Adolescents —

王 怡

### 【問題・背景】

#### 1. 親子関係の子どもへの影響

Spitz (1945) は乳幼児が母親と長期間離れると、子どもの早期発達に重大なダメージを与えると考え、「ホスピタリズム」という概念を提唱することで母子関係が子どもの成長に与える影響の大きさを強調した。また Winnicott (1953) の「ほど良い母親」、Bowlby (1973) の「愛着」概念なども、母親による子どもへの影響を表す概念としてよく知られている。このように親による子どもへの影響は、母子関係を中核として研究が進められてきたが、母子関係の発達は夫婦関係との関連で捉えるべきと久世 (1972) が指摘したように、父親との関係も大事。即ち、母子、父子、夫婦関係の組み合わせが、子どもの社会的行動や性格に影響を及ぼすのである。

#### 2. 文化差と親子関係

ところで親子関係は社会全体とのつながりを持ち、社会の影響を受けている。その結果として親子関係には文化による違いが出てくると言われている (中根、1973)。異なる文化的背景が様々な親子関係のあり方に影響し、それぞれに異なった特徴をもたらすことになる。中国は日本と同じ東

アジアの近隣国であり、歴史や文化において日本と多くの類似点を持つ。しかし近代、現代においては政治・経済体制など異なるところも多い。こうした近年における社会背景の相違は二つの国の親子関係のあり方に異なった影響を与えている可能性がある。

例えば子どもの出生率の低下が日中両国において生じているがその背景は大きく異なっている。日本における少子化のいくつかの原因が少子化社会の白書 (2004) によって取り上げられている。まず、未婚化・晩婚化の進展、また、女性の高学歴化、そして、子育てに対する負担感の増加、経済への不安の増大などがある (阿藤・早瀬、1993)。一方、中国は世界最大の人口を抱えている国であり、エネルギー資源の利用、耕地の減少、人口圧力による就職の難しさ、環境問題などに追われ、1978年に一人っ子政策を実施した。その結果として、今の中国の出生率は大きく低下した。しかし、「不孝有三、無後為大」(親不孝には3つあり、一番不孝なのはあと継ぎの子どもがいないことである)、「多子多福」という伝統的な考えを持つ中国人は、日本人とは異なり、子どもを産みたいが、政策の制約で産めない状況に置かれていると考えられる。

このように同じ少子化傾向を示し、少ない子どもを如何によく育てるかという共通の問題に直面している日中両国であっても、それぞれの文化的社会的背景は異なっている。こうした共通性と相

違が両国の親子関係が子どもの自我の発達に及ぼす影響にどう関わっているのかを研究することは、これからの少子化社会の中で、子どもの自我発達を如何に支えてゆくのかについての示唆を得るために重要かつ意義のあることだと思われる。

### 3. 青年期の発達課題と親子関係

今までの親子関係と子どもの発達に関する文化比較研究はほとんど乳児期、児童期、青年前期の学生を対象とした研究である。しかも親子関係は固定的なものではなく、常に変化し、発展する性質のものであるといわれているように（大西、1972）、子どもの成長に伴って、親子関係のあり方も変わっていく。青年期の場合、Jersild, A.T. (1957) は青年期の親子関係について、それを3幕物のドラマに例えている。それは最初、親子関係は児童期とほぼ変わりがなく、依然として親に依存している。その後、「親の束縛からの解放の闘い」時期になる。しかしこの時期の青年達は第二次反抗期といわれるように親からの分離の意識を強めていくが、実際には親に依存している部分があり、まだ親の保護下で暮らしをし、完全に親との関係を失うわけではない。従って親の影響は子どもに及び続ける。そしてドラマの第3幕において、親に対する感情は児童期における深い愛着がよみがえることになるとというのが特徴である（大西、1972）。Bowlby (1977) も愛着対象への適切な依存が自立を促すと指摘している。また、Ausubel, D.P. (1954) も「心理的離乳」について脱衛星化として、かなり深く理論化しているが、その中で「再依存」を通しての独立の獲得という表現でこのように青年期の親子関係の複雑さを述べている（西平、1988）。現代は子どもの数の減少、生活水準の向上、高学歴化によって、社会経済的独立の時期が遅くなり、親への依存期間が長期間化しているといわれている。

一方で、青年期は心身の成熟や発達に伴い、それまで一貫した安定性を保って発展してきた心と身体が、不安定に陥りやすく、身体的、心理的、社会的な面で、様々な障害が生じてくる時期であ

るといわれる。これらの三つの次元を統合し、一貫性を保ってゆく心の主体が自我であるから、青年期に直面する危機は自我の危機ともいえると指摘されている（木村、1972）。長尾（1989）は、青年が親との関係における独立と依存の葛藤や自我同一性の確立の葛藤を生じ、交友関係も困難となること、特に自我の弱い青年は引きこもりなどの非社会的行動や精神、身体的症状を伴う不適応状態を呈することもあるとし、こうした状態を青年期の自我発達上の危機状態と定義している。この定義に基づいて、長尾（1999）は青年期の自我発達上の危機状態のうち、特に親子関係上の葛藤や自我同一性の葛藤などの青年期の発達の葛藤に対し、自我の強さの程度や前思春期から青年期にかけての交友関係のあり方、家族の凝集性が影響を及ぼしているとしている。また、Reiter & Strotzka (1977) は人が危機状態に陥る規定要因として、現在の家族関係のあり方、特に家族の凝集性の程度、また現在の親子関係のあり方、特に親が子どもに対して支持する程度などを挙げている。

#### 【目的】

今までの研究において、日中の親子関係に関する研究といっても、親の養育態度を調べる研究が多く（辻岡、1976；三浦・森・島田・八重島、1961；田中教育研究所、1955他）、子どもと親との関係性を重視する研究はまだ少ない。さらに認知された親との関係性が青年期における発達の諸側面にどのような影響を与えるのかについて検討した研究はまだ見当たらない。よって、本研究では大学生が認知している親（父親、母親）との関係の特徴を調べ、それについて日本と中国、男性と女性それぞれの類似点及び相違点を検討する。また、同じく日本と中国の大学生の自我発達上の危機状態の特徴を調べ、それについて日本と中国、男性と女性それぞれの類似点及び相違点を検討する。そして、認知された親（父親、母親）との関係が大学生の青年期の自我発達上の危機にどのような影響を及ぼすのかについて、両国の類似点及

び相違点を検討することを目的としている。

## 【方法】

被調査者：日本の調査対象者は、北海道内の私立大学の一年生211名（男性96名、女性115名）。中国の調査対象者は、黒龍江省内の大学一年生213名（男性98名、女性115名）。

調査票：「FDT (Family Diagnostic Test) (東・柏木・繁多・唐澤、2002)」及び「青年期の自我発達上の危機状態尺度 A水準 (ECS: Ego Developmental Crisis State Scale: (長尾、1989)」から成る調査票を実施した。フェースシート：所属、名前、年齢、性別、家族構成。それぞれ「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」まで5段階で回答を求めた。

FDT 親子関係診断検査は 家族関係を診断することを目的としておらずしかも親の養育態度をどのように認知しているかということよりも、親との関係性の質（安全感、信頼感、被受容感などで示されるもの）をどのように認知しているかが問われるものになっている。8つの領域で母親に関する質問と父親に関する質問それぞれ60項目、合計120項目から構成されている。「被拒絶感」尺度は10項目、「積極的回避」尺度は10項目、「心理的侵入」尺度は5項目、「厳しいしつけ」尺度は5項目、「両親間不一致」尺度は5項目、「達成要求」尺度は5項目、「被受容感」尺度は10項目、「情緒的接近」尺度は10項目である。今回の調査では、日本では原版がそのまま用いられた。FDT の中国語への翻訳は、まず筆者が翻訳したものを北京大学の博士課程在学中の日本人1人と中国人大学院生4人、中国人の通訳1人が検討し、不適當な表現を修正したものを使用した。

ECS は七つの領域で26項目から構成されている。「決断力欠如」尺度は5項目、「同一性拡散」尺度は6項目、「自己収縮」尺度は3項目、「自己開示対象の欠如」尺度は2項目、「実行力欠如」尺度は3項目、「親とのアンビバレント感情」尺度は3項目、「親からの独立と依存のアンビバレンス」は4項目。今回の検査では、日本では原版

を用いた。中国語への翻訳は、まず筆者が行い中山大学の日本語講師である日本人一人と中国人の通訳一人、中国の学生三人により検討され妥当な表現と認められたものを使用した。

手続き：中国では2005年3月に集団実施した。日本では2005年4月下旬～5月下旬に集団実施した。両国とも授業時間に配り、その場で回収した。調査質問紙には「2種類質問紙がありますが、どちらも自分の気持ちに最もよくあっているものを選び、○をつけてください。」という教示をした。両国において、記名式で行われたが、記名は強制ではなく、書きたくない場合は書かなくてかまわないと教示した。

## 【結果】

### 1. 親子関係に関する分析

#### 1) 母親との関係についての認知の構造

日本と中国合計424名のデータを用いて、全項目(60項目)を用いて主因子法で因子分析を行った。その上で、項目のデータ分布の偏り(項目得点平均±SDが5以上か1以下であるもの)、項目間の相関( $r > .30$ )、項目の共通性( $h^2 < .13$ )、因子負荷量(因子負荷量 $< .30$ )という4つの基準から項目のチェックを行った。結果、7項目を削除し、53項目について主因子法により再度因子分析を行い(バリマックス回転)因子負荷量の一番高い項目を所属因子と考え、6因子が抽出された(Table 1に参照)。

第1因子は(母からたまにほめられてもうれしくない)といった項目への負荷が高く、内容としては母親を避けることを表している。そこで「積極的回避」因子とした。第2因子は(母は私にあまり関心がないように見える)といった項目への負荷が高く、内容としては母親から拒否されていることを表している。そこで「被拒絶感」因子とした。第3因子は(母は私に「勉強しなさい」としよっちゃう言う)といった項目への負荷が高く、内容としては母親が勉強への要求を表している。そこで「達成要求」因子とした。第4因子は(困っ

ているときや悩んでいるとき、母に気軽に相談できる」といった項目への負荷が高く、内容としては母親と親密さを表している。そこで「情緒接近・受容」因子と命名した。第5因子は（母は私が外で何をしているのかをととも知りたがる）といった項目への負荷が高く、母親に侵入されることを表している、「心理侵入」とした。第6因子は（母は、私を叱る時に、たたいたりすることがある）といった項目への負荷が高く、母親のしつけを表していることから「厳しいしつけ」とした。（第4因子以外、東ら（2002）の因子名を用いた）。

## 2) 父親との関係についての認知の構造

母親の場合と同じ分析手続きを行い、その結果、5項目を削除し、55項目について主因子法により再度因子分析を行った（バリマックス回転）因子負荷量の一番高い項目を所属因子と考え、結果6因子が抽出された（Table 2に参照）。第1因子は（父と一緒にいるとなんとなく安心できる）といった項目への負荷が高く、内容としては父親との親密さを表している。そこで「情緒接近・受容」因子と命名した。第2因子は（父は私に「勉強しなさい」としよっちゅう言う）といった項目への負荷が高く、父親が勉強への要求を表していることから、「達成要求」因子とした。第3因子は（父は本当はいいやながら私と接しているのではないかと思うことがよくある）などの項目への負荷が高く、父親に拒絶されることを表していることから「被拒絶感」因子とした。第4因子は（父はよく私に「母の言うとおりにする必要がない」という）などの項目への負荷が高く、父親と母親の間の不一致を表していることから「両親間不一致」因子とした。第5因子は（父のしつけは厳しすぎる）といった項目への負荷が高く、父親のしつけを表していることから「厳しいしつけ」因子とした。第6因子は（父は私が外で何をしているのかをととも知りたがる）などの項目への負荷が高く、父親に侵入されることを表していることから「心理侵入」因子とした（第一因子を除き、東ら（2002）の因子名を用いた）。

## 3) FDTの下位尺度における国別、性差の検討

FDTの各因子に含まれた項目の合計点をそれぞれの下位尺度得点とし、国別、性差を検討するために、母親、父親別に国（2）×性（2）を独立変数、各下位尺度得点を従属変数とする2要因分散分析を行った。

（1）母親（図1～図4参照）について：「積極的回避」尺度（中：平均=30.73, SD=8.12；日：平均=36.26, SD=12.26）では国の主効果及び性別の主効果が有意（それぞれ $F(1, 420)=36.03$ ,  $p<.01$ . 日本>中国； $F(1, 420)=53.61$ ,  $p<.01$ . 男性>女性）であったが、交互作用は有意ではなかった。

「被拒絶感」尺度（中：平均=16.74, SD=5.41；日：平均=18.95, SD=6.56）では国の主効果及び性別の主効果が有意（それぞれ $F(1, 420)=14.53$ ,  $p<.01$ . 日本>中国； $F(1, 420)=5.64$ ,  $p<.05$ . 男性>女性）であったが、交互作用は有意ではなかった。「達成要求」尺度（中：平均=31.35, SD=4.44；日：平均=22.22, SD=5.48）では国の主効果が有意（ $F(1, 420)=351.33$ ,  $p<.01$ . 中国>日本）であったが、性別及び交互作用は有意ではなかった。「心理侵入」（中：平均=12.71, SD=4.52；日：平均=13.82, SD=4.61）尺度は国の主効果が有意（ $F(1, 420)=5.20$ ,  $p<.05$ . 日本>中国）であったが、性別の主効果は有意ではなかった。交互作用が有意であったため（ $F(1, 420)=7.46$ ,  $p<.01$ ）、単純主効果検定を行った。その結果①中国では男性は女性より高く（ $F(1, 420)=4.51$ ,  $p<.05$ ）、②日本では女性は男性より高い結果（ $F(1, 420)=13.73$ ,  $p<.01$ ）であった。「厳しいしつけ」（中：平均=12.50, SD=4.44；日：平均=12, SD=4.42）、「情緒接近・受容」尺度（中：平均=33.27, SD=6.41；日：平均=32.53, SD=6.96）では国及び性別の主効果、交互作用はいずれも有意ではなかった。

（2）父親（図5～図9参照）について：「情緒接近・受容」尺度（中：平均=104.60, SD=17.99；日：平均=91.58, SD=23.48）では国の主効果が有意（ $F(1, 420)=41.59$ ,  $p<.01$ , 中国>日本）であったが、性別及び交互作用は有意ではなかつ

た。「達成要求」尺度（中：平均=30.91, SD=4.89；日：平均=20.87, SD=5.79）では国の主効果が有意 ( $F(1, 420)=369.95, p<.01$ . 中国>日本)であったが、性及び交互作用は有意ではなかった。「被拒絶感」尺度（中：平均=9.97, SD=3.82；日：平均=11.76, SD=5.20）では国の主効果が有意 ( $F(1, 420)=17.28, p<.01$ . 日本>中国)であったが、性別及び交互作用は有意ではなかった。「両親間不一致」尺度（中：平均=6.48, SD=2.77；日：平均=7.72, SD=3.29）では国の主効果が有意 ( $F(1, 420)=17.98, p<.01$ . 日本>中国)であったが性別及び交互作用は有意ではなかった。「厳しいしつけ」尺度（中：平均=12.28, SD=4.52；日：平均=12.84, SD=4.94）では性別の主効果が有意 ( $F(1, 420)=8.99, p<.01$ . 男性>女性)であったが国及び交互作用は有意ではなかった。「心理侵入」尺度（中：平均=9.13, SD=3.56；日：平均=8.51, SD=3.88）では国、性別及び交互作用いずれも有意ではなかった。

## 2. 青年期の自我発達上の危機 (ECS) に関する分析

### 1) 青年期の自我発達上の危機の構造

日本と中国の対象者を合計した424名のデータに基づき、まず、全項目(26項目)を用いて因子分析を行った。その上でFDTの場合と同様の基準で項目のチェックを行った。その結果、2項目を削除し、24項目について主因子法により再度因子分析を行った(バリマックス回転)。因子負荷量の一番高い項目を所属因子と考え、その結果、5つの因子が抽出された(Table 3を参照)。第1因子は(人と一緒にいてたまらなく自分がいやになることがよくある)などの項目への負荷が高く、内容としてはアイデンティティの不明瞭状態を表していることから「同一性拡散」因子とした。第2因子は(今自分の将来や進路について決定を迫られても何を基準にして考えたらよいかわからない)といった項目への負荷が高く、内容としては物事の判断に迷うことから「決断力欠如」因子

とした。第3因子は(一人で決心がつきにくいとき、親の意見に従いたい反面自分で決心したい気持ちもある)といった項目への負荷が高く、親に対して矛盾な気持ちを表していることから「親からの独立と依存のアンビバレンス」因子とした。第4因子は(親に理解してもらいたい反面、わかってもらわなくてもいいと思う)といった項目の負荷が高く、意欲のなさを表していることから「無気力感」因子と命名した。第5因子は(打ち解けて話ができる人私はあまりいないと思う)といった項目の負荷が高く、内容としては打ち解ける人がいないことを表していることから「自己開示対象欠如」因子とした(第四因子を除き、長尾(1989)の因子名を用いた)。

### 2) ECSにおける国別および性差の検討

ECSの各因子に含まれた項目の合計点をそれぞれの下位尺度得点とし、国別、性差を検討するために、国(2)×性(2)を独立変数、各下位尺度得点を従属変数とする2要因分散分析を行った(図10~図13参照)。「同一性拡散」尺度(中：平均=19.73, SD=5.00；日：平均=20.46, SD=5.75)において国と性差に主効果が見られなかったのに対して交互作用が見られた( $F(1, 420)=7.46, p<.01$ )。単純主効果の検定を行った結果(1)日本では女性は男性より高く( $F(1, 420)=4.62, p<.05$ )、(2)女性において、日本は中国より高い( $F(1, 420)=8.32, p<.01$ )結果であった。「親からの独立と依存のアンビバレンス」尺度(中：平均=20.05, SD=3.99；日：平均=19.13, SD=4.04)において国の主効果( $F(1, 420)=5.27, p<.05$ . 中国>日本)は有意であったが、性別、交互作用は有意ではなかった。「無気力感」尺度(中：平均=9.55, SD=2.84；日：平均=12.10, SD=2.94)において、国の主効果が有意( $F(1, 420)=81.46, p<.01$ . 日本>中国)であったが、性別、交互作用は有意ではなかった。「自己開示対象欠如」尺度(中：平均=4.18, SD=2.08；日：平均=4.68, SD=2.29)では国、性別が有意(それぞれ $F(1, 420)=5.06, p<.05$ . 日本>中国； $F(1, 420)=4.02, p<.05$ . 男性>女

性)であったが、交互作用は見られなかった。「決断力欠如」尺度(中:平均=14.05, SD=4.12; 日:平均=14.78, SD=4.46)では、国、性別の主効果及び交互作用いずれも有意ではなかった。

### 3. 親子関係の各下位尺度と青年期の自我発達上の危機の各下位尺度との関係

日中の大学生の青年期の自我発達上の危機と大学生が認知した親との関係との関連性を検討するために、ECSの「決断力欠如」「親からの独立と依存のアンビバレンス」「無気力感」「自己開示対象欠如」尺度それぞれを目的変数とし、FDT(母親)の6尺度である「被拒絶感」「情緒接近・受容」「心理侵入」「厳しいしつけ」「積極的回避」「達成要求」、及びFDT(父親)の6尺度である「被拒絶感」「達成要求」「情緒接近・受容」「心理侵入」「厳しいしつけ」「両親間の不一致」を説明変数とした重回帰分析を行った。

#### 1) 中国の母親の場合 (Table.8に参照)

ECSの「同一性拡散」尺度に対してはFDTの「被拒絶感」尺度のみが正の有意な影響を示していた。FDT全体で12%の分散を説明している( $\beta = .20, P < .05$ )。ECSの「親からの独立と依存のアンビバレンス」尺度に対してはFDTの「心理侵入」尺度のみが有意な正の影響を与えていた。FDT全体で15%の分散を説明していた( $\beta = .29, P < .01$ )。その他、ECSの「決断力欠如」尺度に対して、5%の分散で関連を示した( $\beta = -.22, P < .05$ )。ECSの「無気力感」尺度に対してFDTの「積極的回避」尺度が17%の分散で関連を示した( $\beta = .21, P < .05$ )。

#### 2) 日本の母親の場合 (Table.9に参照)

ECSの「同一性拡散」尺度に対してはFDTの4つの尺度が「積極的回避」「情緒接近・受容」の各尺度は負の有意な、「被拒絶感」「心理侵入」の各尺度が正の方向に有意な影響を与えており、FDT全体で16%の分散を説明していた(順に $\beta = -.43, P < .05, \beta = -.40, P < .01, \beta = .21, P < .05,$

$\beta = .15, P < .05$ )。ECSの「決断力欠如」尺度に対してはFDTの「積極的回避」「情緒接近・受容」の各尺度が負の有意な影響を与えており、FDT全体で9%の分散を説明していた(順に $\beta = -.34, P < .01, \beta = -.25, P < .05$ )。ECSの「無気力感」尺度に対してFDTの「積極的回避」「心理侵入」の各尺度が正の有意な影響を示した、FDT全体で17%の分散を説明していた(順に $\beta = .28, P < .05, \beta = .15, P < .05$ )。

#### 3) 中国の父親の場合 (Table.10に参照)

まず、ECSの「同一性拡散」尺度に対して、FDTの「情緒接近・受容」「達成要求」の各尺度が正の有意な影響を及ぼしていた。FDT全体で18%の分散を説明している(順に $\beta = .40, P < .01, \beta = .30, P < .01$ )。ECSの「親からの独立と依存のアンビバレンス」尺度に対して、FDTの「達成要求」尺度のみが有意な正の影響を及ぼしており、FDT全体で10%の分散を説明していた( $\beta = .22, P < .05$ )。ECSの「決断力欠如」尺度に対して、FDTの2つの尺度「情緒接近・受容」「被拒絶感」が負の有意な影響を示しており、FDT全体で8%の分散を説明していた(順に $\beta = -.40, P < .01, \beta = -.29, P < .01$ )。ECSの「無気力感」尺度に対して、FDTの「情緒接近・受容」「被拒絶感」の各尺度が負の、「達成要求」尺度が正の有意な影響を及ぼしていた。FDT全体で18%の分散を説明していた(順に $\beta = -.39, P < .01, \beta = .25, P < .01, \beta = -.22, P < .05$ )。ECSの「自己開示対象欠如」尺度に対して、FDTの「情緒接近・受容」尺度が負の、「達成要求」の尺度が正の有意な影響を示していた。FDT全体で15%の分散を説明していた(順に $\beta = -.30, P < .01, \beta = .20, P < .01$ )。

#### 4) 日本の父親の場合 (Table.11に参照)

ECSの「同一性拡散」尺度に対しては、FDTの「心理侵入」尺度のみが正の有意な影響を及ぼしており、FDT全体で10%の分散を説明していた( $\beta = .20, P < .05$ )。ECSの「無気力感」尺度に対してはFDTの「情緒接近・受容」「被拒絶

感」「達成要求」の3つ尺度がいずれも負の有意な影響を及ぼしており、FDT全体で14%の分散を説明していた（順に $\beta = -.42$ ,  $P < .01$ ,  $\beta = -.30$ ,  $P < .01$ ,  $\beta = -.15$ ,  $P < .05$ ）。ECSの「自己開示対象欠如」尺度に対してはFDTの「情緒接近・受容」尺度のみが有意な負の影響を及ぼしており、FDT全体で9%の分散を説明していた（ $\beta = -.25$ ,  $P < .01$ ）。

## 【考察】

### 1. 親子関係について

#### 1) 両親に対する認知構造について

母親においてのみ「積極的回避」因子が抽出された。このことは母親との絆が強く結ばれている学生と絆が希薄でむしろ拒否的である学生がいて、この軸が大きな特徴として抽出されたことを示している。分散分析の結果から、男性がより回避的であり、女子学生が母親とより親和的であることが示されており、こうした因子が抽出された理由だと考えられる。

他方父親においては、母親には認められなかった「両親間不一致」因子が抽出された。これは、父親との関係を認知するとき、単に父親と自分の関係以外に、父親と母親との関係についても意識されやすいことを示している。分散分析の結果から、父親から両親の不和を感じる傾向は、日本学生が中国学生より強いことを示している。おそらく中国の学生の方が両親を一体のものとして捉えやすく、日本の学生が両親を対立的なものとして捉えやすいという傾向が背景にあるものと考えられる。

#### 2) 国別および性別比較について

(1) 母親において、日本が中国より高かったのは「積極的回避」「被拒絶感」「心理侵入」因子だった。日本の青年は母親に干渉されすぎという感情を抱えている傾向があるとすでに指摘されたように（長島、1986）ただ、今回の結果を詳細に見ると、「積極的回避」と「被拒絶感」では日本

男子が高く中国女子が低いという傾向がはっきりと見られるのに対し、「心理的侵入」では、男子において国の差が見られず女子にのみ日本と中国に大きな差が見られた。このことから、日中の差は単に母親が過干渉といった特徴を持つというよりは、日本の男子学生が母親と距離をとりがちであり、一方女子学生は男子学生ほど母親と距離をとらない分、心理的侵入感を高く感じざるを得ないのだと解釈することができるであろう。他方中国では、同じ事情が逆に心理的一体感として感じられるのではないだろうか。そして、稲村・中川（1982）は日本の親が干渉する内容が、主として勉強の面に集中していることであり、それ以外の子どもの活動については関心を持ってないと指摘している。そうした事情が親との関係をより回避的にし、また拒絶されているという印象に繋がっていることも考えられる。一方で松原・鄧（1990）、候（2002）によって、中国では子ども中心的な養育態度、子どもに服従する傾向があると指摘されている。その状況が、中国の学生にとって母親が日本より否定的に捉えられていない結果を説明していると考えられる。その他、母親に受容され、信頼されているという受け取り方は日本と中国、男性と女性の間有意差が見られない。これは朱（1999）の小学生における日中の親子関係の比較研究で、子どもの母親に対する親和性が日中とも高い傾向がみられたという結果と一致している。即ち、文化差を越えて、発達の視点から見ると、小学生にしても、大学生にしても、母親との心理的距離は父親よりも近いといえよう。

(2) 父親の場合、日本が中国より強い傾向を示したのは「両親間不一致」「被拒絶感」因子だった。この中の「被拒絶感」因子については、母親と同じ結果であった。因子分析結果の考察で述べたように、日本の学生が両親の関係をより対立的なものとして受け取りやすい背景には、日本の父親が「会社人間」化しており、子育てへの関わりがより少ないことによって、子どもから見て父親と母親が異なった存在として受け取られやすいことが考えられる。殆どの両親が共働きである中国とは大きな違いといえよう。

また、子どものいない夫婦のほうがサポートや結婚満足度は高い傾向があり、子どもを持つことが夫婦間に様々な緊張や問題を生み出しているといわれており（稲葉、2004）、その結果が子供による親との関係の認知に影響している可能性は在りうる。一つには中国において、日本より高い結果を示したのは「情緒接近・受容」「達成要求」因子だった。現代の中国では、計画経済政策が実施される前から夫婦共働きが普通であり、家事、子育てなど昔は女性がするべき仕事とされて来たことについても、男性の参加は普及している。従って、父親も当然に子どもとの関わりが増え、子どもとの間は親しくなりやすく、そして子どもも父親に受容され、信頼されるように感じやすいのではないかと考えられる。一方、日本での家庭内の父親の位置は中国と異なり、色々な点で父親不在の場合が多い。まず、その一つは現代都市産業社会における職業の性質である。現代の父親は家庭を離れて仕事に従事し、そのためにある程度の父親不在は当たり前のことだと見なされている。そして、管理職、専門職の場合、勤務時間は延長されつつある（David B. Lynn, 1981）。また、末盛（2004）も労働時間と通勤時間が長い場合、父親は子どもと関わる時間が少なくなる傾向があるとも指摘されていることから日中の「情緒的接近・受容」において異なる傾向が見られたのではないかと考えられる。

もう一つ、今回の結果において、特徴的だったのが中国の大学生において、両親からの「達成要求」を感じている程度が日本よりはるかに高いことであった。中国の親が子どもの教育への熱意、子どもの知的レベルへの期待が高いことは多くの先行研究にも指摘されている（白佐ら、2004、姜波ら、2002など）。本研究の結果は従来の研究と一致していると考えられる。近代の中国は計画経済時代から学歴を重視し、高学歴は高肩書きの保証となっている。中国の親達は自分自身がこのような教育価値観の背景に育てられ、そして自分の子どもにも同じ要求をするのが当然だと考えている。さらに、今の大学生を持つ親達の青春時代は1969年に文化大革命が齎した経済的混乱から立ち

直る時期である。この時期は自然災害などの原因で、経済不振となり、精神的に豊かな生活が得られなかった状態で過ごしてきたので、この世代の親達は自分が得られなかったもの、できなかったことをすべて自分の分身と見なしている子どもに賭け、子どもを成功させたい、出世してもらいたい気持ちは格段に強いとも考えられる。

## 2. 青年期の自我発達上の危機について

大学生における青年期の自我発達上の危機において、まず日本がより高い傾向を示した因子「無気力感」について考察する。日本での大学の入学率は45%であるがそれに対して、中国は17%である（都市部）。このように激しい競争を経て大学に入学できた中国の大学生は、より明確な価値観や目標を持ち、自分の夢を叶えるために頑張る気持ちが強いと考えられる。白佐（2004）らも、日本と中国の大学教育のシステムの違いについて、日本は中国より大学の入学率が高い、日本の大学生に少なからず見られるようなモラトリアムとしての生活を送り、本来の目標や夢を失うような学生は少ないのではないかと述べた。但し、今回FDTの結果で明らかになった、中国の親が子どもへの「達成要求」の傾向が強いことを踏まえると、その影響で中国の大学生はプレッシャーを感じながら、受動的になりながらも頑張っている可能性もあるのではないかと考えられる。

また、「自己開示対象欠如」因子について、この結果は閻ら（2005）の日本の大学生の交友関係パターンについての研究の結果と一致している。それは日本人同士の間では浅い交友関係を持つ傾向があるという見解である。また、風間ら（2003）は日本と中国の大学生における精神健康に関する比較研究の中で、日本の大学生は中国よりも抑うつ傾向や対人的不安が大きいと指摘した。これらのことから日本の大学生は周りとの浅い付き合いを持つ傾向があり、人と付き合うことに不安を持つため、自分のことについて深く打ち解けて話せないのではないかと考えられる。但し、一方で、鄭（1985）は中国の大学生より、日本の大学



生の方が個人の独立性を重視していると述べている。鄭が指摘したように日本の大学生は自分の独立性、所謂自立、独自などを保つために、周りと距離を置くのではないかと考えられる。特に日中の差異には女子学生も貢献しており、両国とも女子学生が、より友人と親しく、心を打ち明けてかかわっているという共通の事情があること、そしてそれにもかかわらず、日本の場合にはいずれの性においても上記の解釈が影響している可能性を指摘しておきたい。一方で、中国のECSの結果において特徴的なのは、「親から独立と依存のアンビバレンス」因子の得点が日本より高いことであった。この結果はFDTの中国の親子関係はより密接的であるという結果と一致している。そして、中国の親子関係について朱ら(1999)は親の余暇の時間は大部分を子どもの世話に当て、そして、生活が経済的に豊かになるとともに親は子どもの要求を満足させることに熱心になっており、その中でも、母親は受容的、子ども中心の関わり、統制的関わり方を用いると述べた。その他、白佐ら(1998)も中国の親子関係は過保護であり、子どもの知的な面の教育に熱心であるが、子どもの生活面・社会面での自立についてはあまり重視していないと指摘した。しかし、青年期になると、親子関係においても変化が訪れる。それは子どもが親の保護から独立し、精神的に自立しようとすることである。このように親の過剰な関わり方によって、中国の大学生は親への依存がより大きく、親から離れたいが離れられないという葛藤を抱えやすいのではないかと考えられる。

最後に、「同一性拡散」因子を検討すると、国別、性別の交互作用が認められ、単純主効果の検定を行った。その結果によれば、中国の場合、男性と女性の間には有意差が見られなかったのに対して、日本の場合は女性の方が男性より同一性拡散の傾向が強いことが示された。そして男性の場合は日本と中国の間に有意差が見られなかったのに対して、女性の場合、日本は中国より同一性拡散の傾向が高いことが分かった。即ち、「同一性拡散」において日本の女性のみ高い傾向が見られた。この結果について、松本(1983)は現代社会

において、女性の社会的地位向上、観念的男女平等論の提唱によって、男女の差は曖昧になり、そして、母親役割の減少、女性就職率の増加などにより、従来の伝統的な女性の役割パターンには変化が現れ、「女性としての自己」を見出せず、葛藤状態に陥る女性青年が増加していると指摘した。国民生活白書の調査(2005)によると日本の女性では高学歴化が進展していると指摘され、今後、女性の活躍できる場はもっと広げられると考えられる。中村(1999)は「高学歴の女性」という人間類型には多様な役割期待がされていると述べている。このように役割の広がりによって、日本の女性は如何に自分の生き方、価値観を確立することに困惑を感じ、葛藤状態に陥りやすいのではないかと考えられる。一方、中国では計画経済時期の前から男女共働きという形態は多く、女性の社会進出は普及している。人民網(中国の政府インターネットシステム)によると1999年末現在、中国の女性の就職率は世界平均レベルを12%上回っている。特に、厚生、スポーツなどの領域において、女性がもっとも活躍している。このような社会環境の中で、中国の女性はより安定した目標を持ち、より自分の生きがいを見出しやすいのではないかと考えられる。

### 3. FDT と ECS の関連について

日本と中国の国別に、父親と母親のそれぞれの関係認知が青年の自我発達上の危機にどのような影響を及ぼしているかを明らかにするため、重回帰分析を行った。4種類の対象関係についてそれぞれ5つの自我危機上の尺度に関する分析を行った結果、どの尺度に関しても決定係数の値としては高いもので、.18に過ぎず、親子関係の認知が、自我発達上の危機に強い影響力を及ぼしていると結論付ける結果は得られなかったといえよう。このことは、ECSの個々の尺度に関する重回帰分析において、有意となったFDT尺度に関しても、その影響を個別に解釈するにあたって、慎重ならざるを得ないことを意味している。但し、日中両国において、一つとても興味深い結果が得られ

ている。それは父親との関係において、FDTの「達成要求」の影響力である。中国の大学生は父親から高い達成要求をされると無気力感が高くなるのに対して、日本は無気力感が低くなるという逆の結果であった。白佐ら(2004)によれば、中国の親は子どもに対して大学、大学院のような高学歴を強く期待している。しかし中国の2004年の大学の進学率は17%に過ぎない、このように中国の大学生は父親に高い達成要求をされ、この過剰な期待に対して、大きな心理負担を抱えていると考えられる。多くの学生が、親の過剰な期待は自分の能力を超えていると訴えていることがすでに指摘されている(繆, 1997)。このように親の過剰な期待に圧倒された結果、無力感を感じ、積極的に物事をしようとする意欲も低下してしまうのではないかと考えられる。即ち、無気力感のある部分は望ましくない親の養育態度によって生じるともいえよう。ところが、日本の大学生は父親に「いい成績をとりなさい」などと高い達成要求をされると、逆に意欲が高まることが示された。日本の父親は、家族の中では権威的役割を与えている。子どもは父親を懲罰的で、厳格だと見なしている(David B. Lynn, 1981)。そしてこの超自我としての父親を通して、社会的ルール、強さ、自己主張性を内在化する。このような気持ちを抱えている日本の大学生は父親の話を真剣に受け止め、物事をする意欲も高まるのではないとも考えられる。但し、実際の親の養育態度の影響のほかに、子どもの性格、つまり認知の仕方からの影響の方が強いことも考えられる。或は、さらに別の要因を考えるべきかもしれず、今後の検討が必要であろう。

そして、全体的に眺めると、またいくつかの特徴的な傾向を見て取ることができる。日本の場合、青年の自我発達上の危機への父親との関係認知の影響は、有意な指標が6つ示されているに過ぎないにもかかわらず、母親については8つ示されており、かつ同一性拡散尺度に対して「積極的回避」「被拒絶感」「情緒接近・受容」「心理侵入」と多くの尺度が影響している。他方中国では、母との関係認知が、青年の自我発達上の危機に対し

て有意に影響を及ぼしている尺度数は4つに過ぎないにもかかわらず、父親との関係認知の尺度では10尺度が有意な影響を示しているという違いである。有意な尺度の数に有意差があるかどうかについて、検定しているわけではないが、日本で母親との関係がより大きな影響を与えている可能性があるのに対し、中国では父親の方がより大きな影響を与えている可能性があるという仮説は、魅力的である。そのうえ、日本の母親の場合、「同一性拡散」「決断力欠如」「無力感」という、もっぱら他者との関係を必ずしも前提としない側面にかかわりを示しているのに対し、中国の父親との関係認知は全ての尺度に有意な影響を及ぼしていることが示されている。

次に、影響を与えると仮定されたFDTの尺度から結果を眺めてみよう。日中双方の父親、母親両方に共通している尺度では、「厳しいしつけ」のみがまったく有意な貢献をしていない。父親に特有な尺度である「両親の不一致」も有意な $\beta$ は一つも見られない。「心理的侵入」は日本で僅か一つだけ有意な $\beta$ が見られただけである。他方「情緒的接近・受容」も「達成要求」も6つの有意な $\beta$ が示されている。他方「母親」の場合、「厳しいしつけ」は既に述べたとおりであるが「達成要求」もまったく影響を与えていない尺度である。他方「積極的回避」は5つ、「心理的侵入」は3つの有意なベータを示している。このように見てくると、影響力そのものは高くはないものの、父親が影響を与える軸が「情緒的接近・受容」及び「達成要求」であり、母親が影響を与える軸は「積極的回避」及び「心理的侵入」であるという仮説を立てることも出来そうである。

### 【今後の課題】

日本と中国の文化差を調べるという点において、今回の研究はまだ多くの不十分な点がある。例えば、被験者のサンプリングについて両国の大学生の専攻分野を配慮すること、そして、中国の地域の差も配慮する必要性である。その他、中国の親子関係を研究するためには一人っ子という特徴も

把握する必要があるだろう。また、本研究における大学生と親との関係についての調査方法は、大学生が認知する親との関係であり、実際の親との関係との間には相違点があるかもしれない。従って、精査するためには、親が認知している子どもとの関係の比較調査も必要となると思われる。さらに、本研究では子どもが認知している親との関係しか取り上げていなくて、現代社会において、「核家族化」とはいえ、父親と子の関係、母親と子の関係をそれぞれ見る親子関係より家族全体の力動的な関係を考慮すべきではないかと考えられる。その他、今回の研究において、大学生のECSの「決断力欠如」因子とFDTの両親との間では、有意な関連が全く見られなかった。よって、親子関係以外に関連する可能性のある要因、例えば大学生の性格の要因、或いは青年期において重要となってくる友人関係という要因が大きく関与していることなどが考えられる。

さらに、本研究の結果によると男性と女性において両親との関係性は異なっており、よって男性と女性と両親との関係がそれぞれ彼らの自我発達上の危機への影響も異なるだろう。本研究においては触れられなかったが、性差における影響性についても今後検討すべきである。

## 【謝辞】

本論文は2005年度北翔大学人間福祉学研究科において修士論文として作成したものです。本論文のまとめにあたり、ご指導を頂きました今川 民雄教授、また、修士論文を作成した際にご指導を下さった北翔大学の稲田 尚史教授に厚く感謝いたします。

## 【引用・参考文献】

- 阿藤 誠・早瀬 保子 1993 日本における出生率の動向と要因、中国における人口政策と低出生率 河野 稿果・岡田 寶編 低出生率をめぐる諸問題 大明堂 48-82
- 東 洋・柏木 恵子・繁多 進・唐澤 真弓 2002 FDT

- (Family Diagnostic Test) 親子関係診断検査手引  
日本文化科学社
- Blos, P. 1979 The genealogy of ego ideal. In The adolescent passage. International Universities Press.
- 繆 小春 1997 中国一まず、大人 依田 明(編著) 少子時代の子どもたち—望ましい家庭教育を探る— プレーン出版
- David B. Lynn 1981 父親—その役割と子どもの発達 今泉 信人・黒川 正流・生和 秀敏・浜名 外喜男・吉森 護一共訳 北大路書房
- 藤原 喜悦・宮川 知彰 1973b 青年期の発達の意義 [現代青年心理学講座3] 金子書房
- 稲村 博・中川 志郎 1982 日本型親子—父性と母性の問い直し 講談社
- 神原 文字・高田 洋子 2000 教育期の子育てと親子関係—親と子の関わりを新たな観点から実証する— ミネルヴァ書房
- 風間 雅江・白佐 俊憲・佐藤 至英・今野 洋子・星 信子・佐々木 邦子・金 潔・張 麗霞・鄭紅・果 孝文・寧 式穎・倪 佳波 2004 日本と中国の大学生における精神的健康—性差に関する検討— 北海道浅井学大学短期大学部研究紀要42, 250
- 木村 駿 1972 現代青年の悩み 相場 均編 青年期危機と独創の時代 148
- 黄毓芳・高木 秀明 1994 日中青年の自己意識、対人態度、親子関係に関する比較研究 日本教育
- 候 桂芳 2002 中国における一人っ子青年の性格特性と認知された親の養育態度性格心理学研究 10, 2 85-P97
- 姜 波・佐々木 正美・八重樫 牧子・徐 祖瓊・石川 瞭子 2002 岡山・上海・大連における子育てに関する比較考察 川崎医療福祉学会誌 12, NO.2 197-208
- 久保田 まり 1995a 青年期におけるアタッチメント関係及び対人関係に関する認識と親和傾向との関連 秋田経済法科大学経済学部紀要21, 3, 45-55
- 久保田 まり 1995b アタッチメントの研究 内的ワーキング・モデルの形成と発達 川島書店
- 賀茂 美則 2004 親子関係の質その決定要因 現代家族の構造と変容 P244 東京大学出版会
- 三浦 武・森 重敏・八重島 健二・島田 俊秀 1961 PCR 親子関係診断検査 東京心理
- 牧野 カツコ・中野 由美子・柏木 恵子 1996 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房

- 松原 達哉・鄧 秀 1990 一人っ子の自主性と子どもから見た養育態度に関する研究 (中国と日本の比較) 筑波大学心理学研究12, 175
- 村瀬 春樹 1996 子ども学 季刊 12-3
- 長島 正・福島章1986親と子のかかわり 金子書房
- 長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究, 37, 71-77
- 長尾 博 1999 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教育心理学研究, 47, 141-149
- 落合 良行・伊藤 祐子・斉藤 誠一 2002 青年の心理学 ベーシック現代心理学 [改訂版] (4) 有斐閣大学心理学研究 12, 175
- 落合 良行・佐藤 有耕 1996 青年期における友達との付き合い方の発達の変化 日本教育心理学研究 44, 55-65
- 大西 誠一郎 1972 親子関係の心理 金子書房
- 岡本清孝1999青年期の個体化過程における親子関係と友人関係日本教育心理学会第41回総会発表論文集
- 小此木 啓吾 1980 モラトリアム人間の心理構造1版 中央公論社
- Reiter, L., & Strotzka, H. 1977 Der Begriff der Krise. *Psychiatria Clinica*, 10, 7-26シャルロッテ・ビューラー 1979 原田 茂 (訳) 青年の精神生活 協同出版
- 千石 保 2001 新エゴイズムの若者たち一自己決定主義という価値観 PHP 研究所
- 下坂 剛 2001 青年期の各学校段階における無気力感の検討 日本教育心理学研究 49, 305-313
- 白佐 俊憲 1998中国での一人っ子をめぐる諸問題北海道女子大学短期大学部研究紀要 34, 34-56
- 白佐 俊憲・星 信子・今野 洋子・佐々木 邦子・風間 雅江・佐藤 至英・田口 智子・張 麗霞・呉 衛東・鄭 紅・果 孝文・寧 式穎 2004日本と中国の幼児の気質的行動特徴と母親の養育観 北海道浅井学園大学とハルビン学院の学術交流研究紀要
- 鈴木 浩二 1995 臨床を通してみた日本の親子関係 日本心身医学会 35-3
- 末盛 慶 2004 父親・母親と子ども 現代家族の構造と変容 P231 東京大学出版会
- 朱文莉・西川 和夫 1999 親子関係に関する日中比較研究 三重大学教育学部研究紀要 50教育科学149-159
- 辻岡 美延 1976 親子関係診断尺度 EICA 実施手引き 日本・心理テスト研究所
- 田中教育研究所 1955 TK 式診断的親子関係検査 田中出版株式会社
- 高橋 哲郎 1988 改訂子どもの心と精神病理一力動精神医学の臨床 岩崎学術出版社
- 田中正 1997 親子関係と自我同一性の関連に及ぼす素質的要因の影響 日本教育心理学会第39回総会発表論文集 197
- 鑑 幹八郎 1990 アイデンティティ心理学講談社
- 鑑 幹八郎・宮下 一博・岡本 祐子共編 1997 アイデンティティ研究の展望IVナカニシヤ出版 150
- 若林 敬子 1995 中国の人口問題 東京大学出版会 10, 40
- 若林敬子 1997 現代中国の人口問題と社会変動新曜社
- Winnicott, D. W. 1977牛島 定信監訳 情緒発達 of 精神分析理論 岩崎学術出版社 2005
- 依田 新 1968 現代青年の人格形成 金子書房
- 依田 新・大西 誠一郎・斉藤 耕二・津留 宏・西平 直喜・藤原 喜悦・宮川 知彰 1973a 青年期の比較文化的考察 [現代青年心理学講座2] 金子書房
- 稲葉 昭英 2004 夫婦関係のパターンと変化 現代家族の構造と変容 P261 東京大学出版会

Table 1 FDT (母) の因子分析結果①

項 目	1	2	3	4	5	6	h <sup>2</sup>
28母からたまにほめられて、少しも嬉しくない。	.64	.31	-.02	-.10	.02	-.02	.52
9、母と一緒にいると楽しい。	-.58	-.23	.14	.41	-.14	-.19	.63
34、母とおしゃべりをして楽しむことは、ほとんどない。	.57	.29	.11	-.29	.11	.00	.53
3、母のそばにいてだけで、暖かい気持ちになる。	-.56	-.15	.24	.35	-.07	-.18	.55
46、母が、私にべたべたするのは、嬉しくない。	.55	-.06	-.02	-.10	.13	-.01	.34
21、母といると、なんとなく安心できる。	-.53	-.23	.09	.41	.03	-.13	.54
39、母が何か喜んでいると、私も一緒に嬉しくなる。	-.52	-.22	.37	.23	-.11	-.12	.54
52、母とは離れていたい。	.52	.29	-.24	-.13	.18	.25	.52
57、母のことが好きだ。	-.52	-.35	.24	.32	-.03	-.15	.58
4、母と一緒に外出したりすることは、ほとんどない。	.51	.18	.07	-.18	.07	-.04	.33
51、母が何か悲しんでいると、私も悲しくなってしまう。	-.48	-.18	.40	.20	-.08	-.10	.48
8、母から、これまでに何か嬉しいことをしてもらった記憶は、ほとんどない。	.46	.40	-.11	-.17	.07	.14	.44
40、困ったことがあっても、母に相談しようとは思わない。	.45	.19	.10	-.41	.10	.04	.43
22、母が、私の気持ちを理解してくれなくても平気だ。	.44	.10	-.04	-.19	-.03	.07	.25
58、母に何を言われても、気にならない。	.39	.12	.02	.22	-.10	-.04	.23
32、母は、本当はいやいやながら私と接しているのではないかと、思うことがよくある。	.09	.67	.08	-.12	.16	.00	.51
44、母は、私にあまり関心がないように見える。	.23	.63	-.09	-.20	.04	.19	.53
26、父は、私と話すのが好きではないらしい。	.23	.59	-.03	-.13	.06	.04	.43
38、母に、やさしくしてもらった記憶がない。	.30	.58	-.04	-.15	.00	.11	.45
14、母は、父が私のことをあまり考えていないと思っている。	.30	.53	-.14	-.12	-.05	.10	.42
19、母は、私の幸福を心から願っている。	-.28	-.51	.39	.14	.05	-.06	.51
31、母は、家族を大切にしている。	-.12	-.47	.19	.31	.04	.04	.37
16、母と、できるだけ顔を合わせないようにしている。	.39	.42	.07	-.19	.10	.11	.39
50、私は母の言うとおりにしているが、私が本心を言ったら、母は私をすぐに突き放すと思う。	.14	.39	.19	-.19	.21	.31	.39
56、母は、私には他の兄弟や友達よりも長所が少ないと、思っている。	.11	.37	.02	-.15	.17	.29	.29
13、母は、私を基本的に信用してくれているのだと思う。	-.17	-.32	.27	.31	-.17	-.27	.40
36、母は私に、「勉強しなさい」としょっちゅう言う。	.06	-.03	.75	-.07	.02	.20	.62
48、母は、私が将来、皆から尊敬されるような職業について欲しいと思っている。	-.06	-.05	.66	-.03	-.02	.01	.45
12、母は、私の成績を気にする。	.04	-.08	.64	-.03	.18	.20	.49
7、母は、私がよい成績を取ると、自分のことのように喜んでくれる。	-.19	-.21	.61	.13	.06	-.12	.48
24、母は私に、「いい学校に入りなさい」という。	.14	.19	.54	-.09	.19	.15	.42
1、母は、私の将来を楽しみにしている。	-.14	-.31	.50	.12	.00	-.05	.38
20、母は、私のことをいらない人間だと思っているのではないかと、心配になる。	-.09	.26	.42	-.07	.06	.13	.28
37、母は、自分の失敗を私に繰り返させたくないと思っている。	-.07	.01	.33	.08	.10	.15	.16

Table 1 FDT (母) の因子分析結果②

項	目	1	2	3	4	5	6	h <sup>2</sup>
45、困ったときや悩んでいるとき、母に気軽に相談できる		-.30	-.10	.67	-.10	.10	.00	.40
55、母は私の話をよく聞いてくれる		-.20	-.30	-.20	.62	.05	-.10	.37
27、母とは気が合う		-.40	-.20	.00	.51	-.20	-.10	.42
43、母は、皆で何かを決める時、私の意見や考えを大切にしてくれる。		-.13	-.25	.17	.49	-.16	-.26	.44
15、母のような人間になりたいと思う。		-.34	-.09	-.16	.49	.02	-.04	.39
33、私は、母を全面的に信頼している。		-.21	-.44	.19	.44	-.09	.01	.48
30、母は、悪いことは悪いこと、よいことはよいことと、はっきり言う。		-.10	-.28	.05	.41	-.01	.14	.29
25、母は、私が何か悪いことをして気にしていると、慰め、励ましてくれる。		-.34	-.26	.26	.40	-.10	-.17	.44
49、私が病気になった時に、母が必死に看病してくれたことを、よく覚えている。		-.26	-.22	.15	.36	.06	-.09	.28
5、母は、私がお家の外で何をしているのかを、とても知りたがる。		.07	.01	.01	-.06	.74	.06	.56
17、母は、学校での出来事を細かく聞きたがる。		.06	-.03	.28	.00	.61	.12	.46
29、私に電話がかかってくると、父は誰からの電話か聞きたがる。		-.02	.08	.10	-.03	.52	.10	.30
41母は何かについて、いろいろと口を出してくる。		.20	.14	-.05	-.08	.50	.29	.40
53、私の部活動や趣味について、母はあれこれと指図する。		.11	.32	.15	-.14	.40	.31	.41
42、母は、私を叱る時に、たたいたりすることがある。		.11	.18	.16	-.06	.07		.39
18、母から大きな声で怒鳴られたり、注意されたりすることがある。		.01	-.01	.26	-.11	.11	.54	.38
6、母は、私が何か悪いことをすると、厳しく叱る。		-.03	-.06	-.04	.12	.34	.50	.39
54、母の嫉は、厳しすぎる。		.14	.18	.16	-.07	.43	.50	.52
60、母は私に、「そんなことをしていると、将来ろくな人間にならない」という。		.14	.33	.19	-.11	.11	.43	.38
寄与率		10.30	9.20	7.50	7.40	4.50	4.40	
累積寄与率(%)		10.30	19.50	27.0	34.40	38.90	43.30	

Table 2 FDT (父) の因子分析結果①

項 目	1	2	3	4	5	6	h <sup>2</sup>
21、父といると、なんとなく安心できる。	.79	.17	-.08	-.11	-.11	-.02	.28
9、父と、一緒にいると楽しい。	.78	.14	-.08	-.18	-.12	.00	.68
3、父のそばにいてだけで、暖かい気持ちになる。	.75	.25	-.04	-.14	-.15	.02	.67
27、父とは気が合う。	.74	-.05	-.18	-.01	-.12	-.01	.59
57、父のことが好きだ。	.71	.22	-.20	-.27	-.14	.01	.68
33、私は、父を全面的に信頼している。	.70	.09	-.33	-.14	.00	-.08	.63
34、父とおしゃべりをして楽しむことは、ほとんどない。	-.68	-.02	.19	.21	.12	-.06	.56
45、困った時や悩んでいる時、父に気軽に相談できる。	.66	.03	-.07	.07	.10	-.08	.46
25、父は、私が何か悪いことをして気にしていると、慰め、励ましてくれる。	.64	.24	-.20	-.05	-.14	.05	.52
40、困ったことがあっても、父に相談しようとは思わない。	-.62	.01	.08	.13	-.02	.10	.42
55、父は、私の話をよく聞いてくれる。	.61	-.04	-.19	-.02	-.06	.06	.42
16、父と、できるだけ顔を合わせないようにしている。	-.60	.04	.19	.27	.22	.01	.52
15、父のような人間になりたいと思う。	.60	-.09	-.12	.01	.05	-.17	.41
52、父とは離れていたい。	-.56	-.16	-.05	.37	.29	-.14	.58
28父からたまにほめられて、少しも嬉しくない。	-.55	-.08	.16	.44	.07	.00	.53
43、父は、皆で何かを決める時、私の意見や考えを大切にしてくれる。	.52	.14	-.30	-.04	-.18	-.13	.42
8、父から、これまでに何か嬉しいことをしてもらった記憶は、ほとんどない。	-.52	-.10	.28	.27	.13	.01	.44
39、父が何か喜んでると、私も一緒に嬉しくなる。	.51	.37	-.27	-.24	-.14	.00	.54
13、父は、私を基本的に信用してくれているのだと思う。	.50	.12	-.29	-.14	-.25	-.08	.43
38、父に、やさしくしてもらった記憶がない。	-.50	.00	.46	.17	.10	.00	.49
22、父が、私の気持ちを理解してくれなくても平気だ。	-.48	-.05	.07	.22	.14	-.06	.31
4、父と一緒に外出したりすることは、ほとんどない。	-.47	-.13	.15	.13	.06	-.01	.27
51、父が何か悲しんでいると、私も悲しくなってしまう。	.46	.45	-.14	-.26	-.18	-.01	.53
49、私が病気になった時に、父が必死に看病してくれたことを、よく覚えている。	.43	.30	-.18	-.13	-.09	.09	.34
30、父は、悪いことは悪いこと、よいことはよいことと、はっきり言う。	.43	.03	-.26	-.14	.23	-.04	.32
10、父は、自分勝手な人間だと思う。	-.38	-.05	-.03	.24	.14	.07	.23
2、父は、私のことを「こんな子でなかったらよかったのに」と、思っているようだ。	-.37	.34	.18	.30	.25	.03	.44
35、私のことについて、両親の意見はあまり一致していない。	-.35	.14	.20	.31	.05	.16	.30

Table 2 FDT (父) の因子分析結果②

項 目	1	2	3	4	5	6	$h^2$
36.父は私に、「勉強しなさい」としよっちゅう言う。	.09	.74	.11	-.06	.14	.10	.60
12.父は、私の成績を気にする。	.11	.71	.04	-.08	.20	.12	.58
48.父は、私が将来、皆から尊敬されるような職業について欲しいと思っている。	.14	.62	-.14	-.10	.00	.07	.44
24.父は私に、「いい学校に入りなさい」という。	-.05	.60	.15	.16	.27	.05	.48
7.父は、私がよい成績を取ると、自分のことのように喜んでくれる。	.35	.55	-.18	-.21	-.04	.09	.51
20.父は、私のことをいらぬ人間だと思っているのではないかと、心配になる。	-.04	.50	.27	.07	.15	.06	.35
1.父は、私の将来を楽しみにしている。	.31	.49	-.29	-.23	-.03	.16	.50
37.父は、自分の失敗を私に繰り返させたくないと思っている。	.05	.45	-.18	.14	.01	.02	.26
32.父は、本当はいいやながら私と接しているのではないかと、思うことがよくある。	-.38	.16	.55	.20	.04	.04	.51
19.父は、私の幸福を心から願っている。	.40	.36	-.50	-.22	-.13	.01	.61
31.父は、家族を大切にしている。	.47	.06	-.50	-.13	.12	-.10	.52
26.父は、私と話すのが好きではないらしい。	-.37	.01	.50	.17	.19	-.09	.45
44.父は、私にあまり関心がないように見える。	-.43	-.05	.49	.20	.05	-.11	.48
14.父は、父が私のことをあまり考えていないと思っている。	-.41	-.11	.49	.23	.07	.00	.48
47.父はよく私に、「お母さん（お父さん）の言うとおりにする必要はない」という。	-.08	-.07	.14	.62	.01	.07	.42
11.父は、母が私のことをあまり考えていないと思っている。	-.16	-.07	.20	.57	.08	.03	.41
23.父は私に、母の悪口をよく言う。	-.23	-.02	.09	.54	-.04	.07	.36
50.私は父の言うとおりにしているが、私が本心を言ったら、父（母）は私をすぐに突き放すと思う。	-.30	.10	.22	.37	.27	.16	.38
6.父は、私が何か悪いことをすると、厳しく叱る。	.00	.01	-.10	-.01	.75	.14	.59
18.父から大きな声で怒鳴られたり、注意されたりすることがある。	-.09	.12	.07	-.07	.61	.12	.42
54.父の躰は、厳しすぎる。	-.20	.17	.04	.24	.52	.17	.43
42.父は、私を叱る時に、たたいたりすることがある。	-.19	.14	.25	.07	.48	.09	.36
60.父は私に、「そんなことをしていると、将来ろくな人間にならない」という。	-.22	.25	.17	.24	.42	.00	.37
5.父は、私が家の外で何をしているのかを、とても知りたがる。	-.06	.05	-.10	.03	.16	.71	.55
17.父は、学校での出来事を細かく聞きたがる。	.07	.28	.02	.08	.22	.69	.61
29.私に電話がかかってくると、父は誰からの電話か聞きたがる。	-.04	.09	.06	.08	.05	.61	.39
53.私の部活動や趣味について、父はあれこれと指図する。	-.17	.19	.00	.33	.31	.35	.39
<b>寄与率</b>	<b>20.10</b>	<b>7.50</b>	<b>5.80</b>	<b>5.50</b>	<b>4.90</b>	<b>3.30</b>	
<b>累積寄与率(%)</b>	<b>20.10</b>	<b>27.70</b>	<b>33.50</b>	<b>38.90</b>	<b>43.80</b>	<b>47.10</b>	



Table 3 ECS の因子分析の結果

項	目	1	2	3	4	5	h <sup>2</sup>
26. 人といっしょにいて、たまたま自分がいやになることがよくある。		.59	.05	-.04	.38	.05	.50
22. 今、何かにおいつめられているような感じをもっていて、自由に動けない気持ちである。		.59	.03	.22	-.04	.03	.40
25. 今の自分は本当の自分でないような気がする。		.55	.06	.13	.06	.06	.32
◆3私の生活は、いきいきしているように思う。		.48	.16	-.05	.09	.16	.29
18. 今、一つのことに集中して打ち込むことができない。		.39	.21	.13	.06	.14	.24
◆2他人から「仲間はずれにされている」と感じることはほとんどない。		.36	.04	-.04	-.14	.16	.18
9. 私は、どのような職業にもつけるという気持ちになる時と何もなれないのではないかと感じる時がある。		.31	.23	.29	.08	-.08	.25
◆15. 今、将来の進路については、じっくり考えていてその決断ができる段階である。		.02	.63	.08	-.08	.05	.42
1. 今、自分の将来の進路について決断を迫られても何を基準にして考えたらよいかわからない。		.09	.61	.13	.26	.08	.47
◆24. 大切な決断を迫られた場合、私はいつもじっくり考えた上で、思い切りよく決断できる。		.16	.56	-.19	.01	-.07	.38
◆21. 決断力があるため、今、何かの決断を迫られても混乱せず、決断できるだろう。		.23	.56	-.20	.12	-.16	.45
8. これまで自分自身で将来や進路を決定した経験が少ないため、その決断を迫られると不安になる。		.07	.51	.26	.05	.15	.35
20. 親といると、いっしょにいてだけでなんとなく安心できる反面、自分をほうっておいてほしいという気持ちもある。		.03	.02	.52	.10	.01	.28
19. うれしいこと、楽しいことは、まず親に報告したい気持ちもある反面、そのことを自分だけで大切にしたい気持ちもある。		.06	.02	.48	.04	.10	.25
14. 一人で決心がつきにくい時には、親の意見に従いたい反面、自分で決心したい気持ちもある。		-.04	.03	.40	.05	-.10	.17
7何かに迷っている時、親に「これでいい」と聞きたい反面、聞かないで自分で解決したいと思う。		.04	-.07	.35	.30	.11	.23
16. 私には「理想の自分」がたくさんあって、どれが本当になりたい自分なのかさっぱりわからない。		.30	.27	.32	.00	.11	.28
23. 親の言うこと、考えていることは、正しいと信じられる反面、疑問も生じてくる。		.16	-.03	.30	.02	-.10	.13
6. 困っている時や悲しい時に、親に気持ちをわかってもらいたい反面、わかってもえなくてもいいと思う。		-.04	.01	.14	.67	.09	.48
13. 親にもっと理解され、愛してもらいたい反面、理解してもらわなくてもよいという気持ちもある。		-.01	.05	.27	.46	.11	.31
5. なんでもものごとをはじめるのがおっくう(めんどう)だ。		.27	.24	.07	.39	.13	.30
12. やれる自信があっても、人から見られているとうまくできない。		.28	.16	-.06	.31	.03	.20
4うちとけて話ができる人は、私にはあまりいないように思う。		.21	.05	-.07	.16		.54
11. 私には、お互いに本当に理解し合える人は、ほとんどいないと思う。		.30	.00	.02	.25	.55	.46
寄与率		8.70	8.20	6.00	5.80	4.20	
累積寄与率(%)		8.70	16.90	22.80	28.60	32.80	

◆は逆転項目を示している

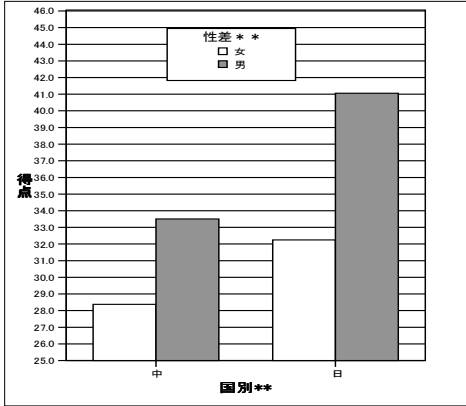


図1 FDT (積極的回避・母)について国及び性別の平均値

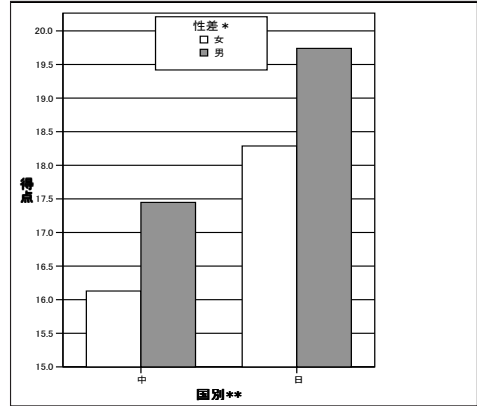


図2 FDT (被拒絶感・母)について国及び性別の平均値

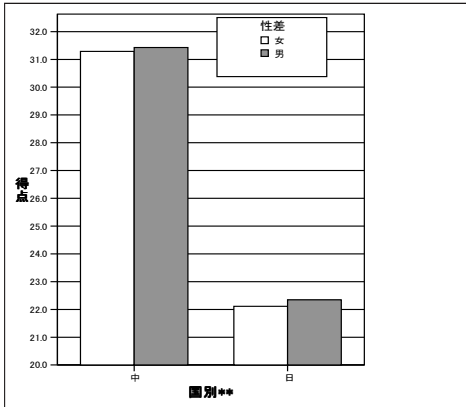


図3 FDT (達成要求・母)について国及び性別の平均値

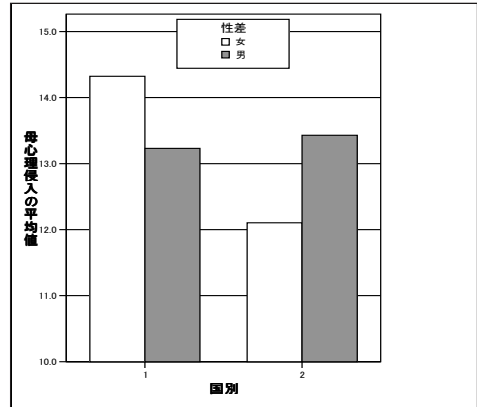


図4 FDT (心理侵入・母)について国及び性別の平均値

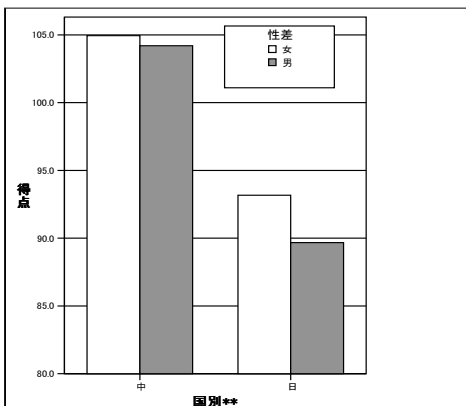


図5 FDT (情緒接近・受容・父)について国及び性別の平均値

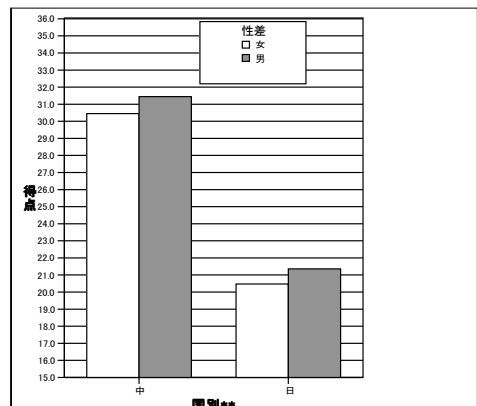


図6 FDT (達成要求・父)について国及び性別の平均値

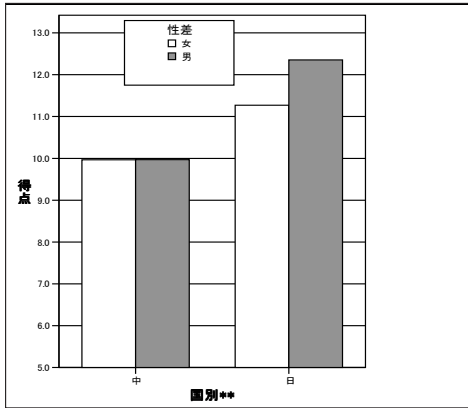


図7 FDT (被拒絶感・父) について国及び性別の平均値

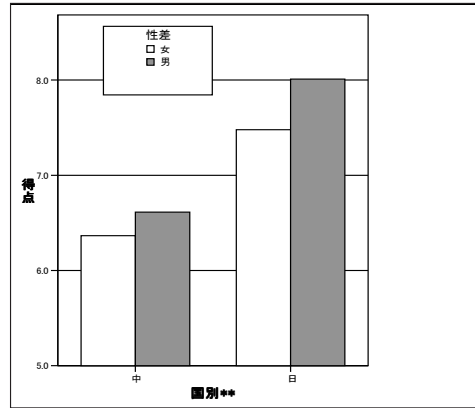


図8 FDT (両親間不一致・父) について国及び性別の平均値

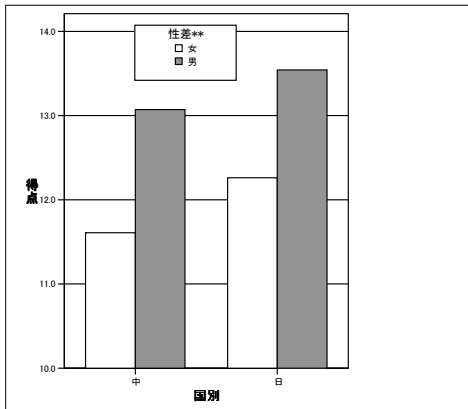


図9 FDT (厳しいしつけ・父) について国及び性別の平均値

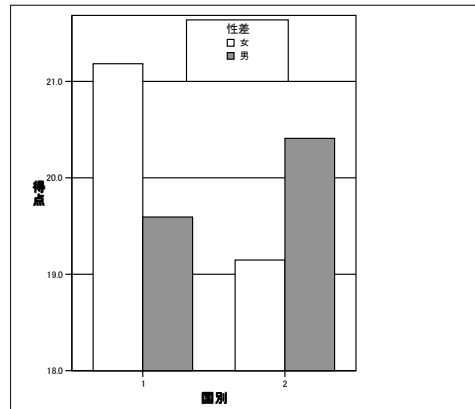


図10 ECS (同一性拡散) について国及び性別の平均値

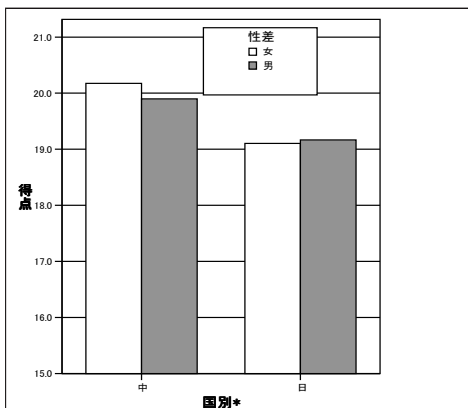


図11 ECS (親からの独立と依存のアンビバレンス) について国及び性別の平均値

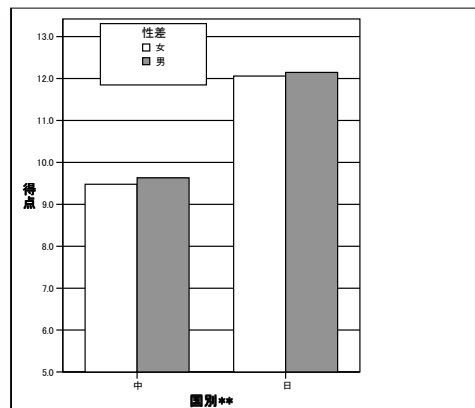


図12 ECS (無気力感) について国及び性別の平均値

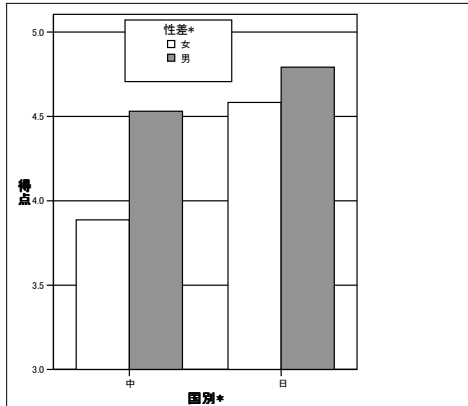


図13 ECS（自己開示対象欠如）について国及び性別の平均値

Table 8 ECS を目的変数とし FDT（母親・中国）を説明変数とした重回帰分析の結果

（数値は標準偏回帰係数）

FDT \ ECS	同一性拡散	親からの独立と依存のアンビバレンス	決断力欠如	無気力感	自己開示対象欠如
積極的回避	.03	.03	-.22 *	.21 *	.16
被拒絶感	.20 *	.13	.10	.03	.17
情緒接近・受容	-.05	-.02	-.16	-.16	-.03
心理侵入	.04	.29 **	.00	.00	.03
達成要求	.14	.04	.13	.14	.13
厳しいしつけ	.07	-.02	.02	.08	-.04
R <sup>2</sup>	.12 *	.15 **	.05 **	.17 **	.11

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table 9 ECS を目的変数とし FDT（母親・日本）を説明変数とした重回帰分析の結果

（数値は標準偏回帰係数）

FDT \ ECS	同一性拡散	親からの独立と依存のアンビバレンス	決断力欠如	無気力感	自己開示対象欠如
積極的回避	-.43 *	.07	-.34 **	.28 *	-.03
被拒絶感	.21 *	.07	.19	.01	.13
情緒接近・受容	-.40 **	.05	-.25 *	-.09	-.12
心理侵入	.15 *	.12	.15	.15 *	.03
達成要求	.02	.10	-.11	-.11	-.13
厳しいしつけ	.02	.01	-.08	.00	.10
R <sup>2</sup>	.16 **	.05	.09 **	.17 **	.07

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table 10 ECS を目的変数とし FDT (父親・中国) を説明変数とした重回帰分析の結果

(数値は標準偏回帰係数)

FDT \ ECS	同一性拡散	親からの独立と依存のアンビバレンス	決断力欠如	無気力感	自己開示対象欠如
情緒接近・受容	.40 **	-.02	-.40 **	-.39 **	-.30 **
達成要求	.30 **	.22 **	.10	.25 **	.20 **
被拒絶感	-.13	.05	-.29 **	-.22 *	-.07
両親間不一致	.13	.11	.04	.15	.20
厳しいしつけ	-.12	-.02	-.06	-.10	-.08
心理侵入	-.03	.09	.04	.08	.05
R <sup>2</sup>	.18 **	.10 **	.08 **	.18 **	.15 **

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table 11 ECS を目的変数とし FDT (父親・日本) を説明変数とした重回帰分析の結果

(数値は標準偏回帰係数)

FDT \ ECS	同一性拡散	親からの独立と依存のアンビバレンス	決断力欠如	無気力感	自己開示対象欠如
情緒接近・受容	-.14	-.08	-.01	-.42 **	-.25 *
達成要求	-.05	.10	-.17 *	-.15 *	.00
被拒絶感	.03	-.15	-.02	-.30 **	.04
両親間不一致	.03	.14	.02	.11	-.02
厳しいしつけ	.10	.03	.05	.10	.05
心理侵入	.20 *	-.02	.09	-.02	.03
R <sup>2</sup>	.10 **	.04	0.02	.14 **	.09 **

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$